卓　　話

平成 27 年 4 月 14 日

『 奉仕プロジェクトからのインフォメーション 』

奉仕プロジェクト委員会　副委員長　安藤元一

はじめに　　奉仕プロジェクト委員会とは

昨年度（平成２５年７月～２６年６月）中長期戦略委員会という特別委員会が組織されました。その時の委員長が私でありました。この委員会は数年前よりロータリークラブ会員の減少に歯止めがかからなくなった事に国際ロータリーや地区も危機感を感じ、この委員会を立ち上げた次第です。当クラブ活動の棚卸を兼ねた色々な角度でアンケートを実施し、中長期のビジョンが策定されました。それが今期の中山会長の方針にもあります

１．会員の増強

２．例会出席率 100%

３．ロータリーの綱領を理解し、実践をする。

であります。今年１２月に当クラブ創立２５周年記念が開催されますが、その５年後３０周年にはこのビジョンを達成しようとするものです。ですからこの奉仕プロジェクト委員会では本年度のクラブ運営がそのビジョン達成に沿った事業が行われているかを見極めるために創られた委員会であります。

１の会員増強に関しては確かに前期には加納エレクトを中心に増員がされましたが、加藤会員のような不幸なことも有りなかなか純増に結びついていないのが現状であります。また、２の出席率については、徐々にではありますが出席率は以前に比べ向上していると思います。３番目の綱領を理解し、実践は　というとなかなか難しいものがあり、こればかりは当ロータリークラブでの役目に就いて各自が勉強し、その立場で意識を高め行動に移して頂く事が一番早道かと思います。そういった意味合いでは毎年の年度末の委員会事業の引き継ぎは、大きなクラブ活動の一つだと私は思う次第です。

国際ロータリークラブ第 355 地区ガバナー（1968～69）群馬県桐生市出身

前原勝樹著書「ロータリー入門書」より

ロータリーの理念と実践

・ロータリーは実践哲学と言われている。

・論語に「学んで習わざれば即ち暗し、習って学ばざれば、即ち危うし」とあります。

ここでロータリー的に言うと「学ぶ」とは理念を身につけること。そして「習う」とはこれを実践に移すことです。

・即ちロータリーでは理論だけ判っても実践が伴わなければ真のロータリアンではないと同時に、シャニムニ実践に突進しても、それがロータリーの理念にかなわなければ、それはロータリー活動ではないということです。一般的には知識を学んでも、自分で良く考えて研究しないと理解があやふやになる。また、逆に自分だけの考えだけに頼って、広く先人の意見や知識を学ばないと独断に陥る危険性があるということです。

ロータリーの歴史と発展史

1905 年 2 月 23 日青年弁護士ポール・ハリスによりシカゴロータリークラブが誕生。ポール・ハリスの法律事務所は当時たいへん繁盛していたそうですが、ポール自身はたいへん淋しい毎日を送っていたそうです。それは、弁護士を訪ねる依頼人は、利欲の為に大なり小なり嘘を言ってくる人々であります。だいたい弁護士は依頼人がどの程度嘘をついているかを見抜くことが、仕事の始まりということらしいです。

しかし、ポールは純真な心の持ち主でしたので、こうした人々ばかりを相手にしていた為、淋しかったのです。もっと人間らしい心温まるような付き合いができる、いわば心の友を求めていたそうです。そんなある日、今でいうちょっと高級居酒屋で数人の市民と話し合う機会があったようです。ところが彼らは勝手に自分のホラを吹いたり、平気でコボシ話をしていたそうです。ポールはそれを観ていてまったく職業が違っている人たちの集まりだからこそ、こんなに言いたい事を言い合っていることに気がついたのでした。即ち一業一人で人を集めればきっと楽しいクラブが出来ると！それを実行し出来たのがロータリークラブです。当時、クラブといった組織はアメリカにはたくさんありました。ユダヤ人のクラブ、何々大学卒業生のクラブ、弁護士のクラブとかですが、これらはいずれも立派な会館を持ち独自に経営していました。しかし、いろんな事情でクラブ会員間に格差が付き、必ずしも楽しいものではなかったようです。一方のロータリークラブは職業分類という点で全く平等でしたし、庶民の集まりですから評判も良かったようです。ただ、このクラブは会館を持たないため、あちこちの事業所やホテルと会場を変えていきました。こうして引っ越して歩く、回って歩くので「ロータリー」と名付け、マークも引っ越しを表現する「馬車の車輪」をつけたそうです。

そのうちロータリークラブに集まる会員は、商売人の集まりでもあるため困った事は相談し合う、慰め合う、励まし合う、進んでお互いに助け合い、ついには借金の保証人になるようになったようです。この時に馬車のマークを「ギヤ」のマークに変更して相互扶助を旗印にするようになったのです。しかし、その頃アメリカは不況のどん底でしたので、会員の中には破産に瀕する者もあり、これをカバーしようと犯罪にまで手を染めそうな人も出たようでした。この時、期せずして会員の胸に浮かんだのが「商売道徳の高揚」ということでした。買う身になって物を売る、使う身になって物を作る、受ける身になってサービスをする、このように相手の身になって職業に励みました。

この職業奉仕の成果によって、ロータリアンは大きな信念を持つことができるようになりました。即ちこの相手の身になっての言動、即ち奉仕の理想は単に職業の成功ばかりでなく、よりよい社会を作るのに大切な信条であるということであります。また、職業の場ばかりでなく、家庭生活に於いても、一般社会生活に於いても、あらゆる生活の場にこの奉仕の理想を以って行動することが、住みよい社会をつくる道であり、これこそがロータリーの責任と名誉である。

この時に奉仕の理想を中心として集まる同志の集団の意味を込めギヤのマークの中心に鍵孔のような図形を加えロータリー精神の棒がハマったのです。ロータリアンの奉仕の理想が、ロータリアンの職業を通じ、生活を通じて、社会に影響力を及ぼそうという理想と意欲を表現したものです。

こうした奉仕の理想が世界各国に受け入れられ同志が増えおのずと国際理解に対して大きな役割を果たすようになりますと、これを強調し組織化したものが国際奉仕であります。

このようにロータリーは始めに親睦・友愛があり、ここから職業奉仕が生まれ、社会奉仕に成長し、それが拡がって国際奉仕になったものであり、これを貫く思想を「奉仕の理想」と呼ぶようになったということです。